

「社会」を中心とした指導の実際

東京女子大学附属幼稚園

お茶の水女子大学附属幼稚園

三才児

堀合文子

幼稚園の中で、特殊な指導を考えなければならぬのは三歳児だ。そして将来の一番基礎がつけられるのもこの一年だ。もちろん、四歳五歳も基礎はつづられ続けるが、未発達という点においては三歳児がとくに考慮されるべきだと思う。

幼児教育における社会の領域においては、他の領域以上、時期や年齢を区切らず指導されているもので、その中は広く、他の領域と生活の中では錯綜している。大きく取り上げ

れば全生活であり、無関心であれば生活の一端においやられる。

三歳児一年間の生活は殆んどこの領域の生活で、将来の幼児の活動への起動力となる。

三歳児指導のむずかしさ进行うとき、まず指導してきた一年間を反省してみよう。

目標は、

○よろこんで幼稚園へ通園するように。

○友だちと元気によくあそぶように。

○基本的習慣、幼稚園生活をする上に必要な

習慣をみにつけるように。(これは一般に生活習慣として指摘されていること及び、園としての約束をまもるなども含める。)

以上の三つで、これは一年間通しての大きい目標であり、また学期別の目標であり、週別、日案の目標でもある。

指導

両親の加護から、踏出した一歩である幼稚園生活も、幼児の生活は「あそび」であるか

ら教育の場である幼稚園という環境も、幼児にとつては家庭と同じ「あそび」の生活が続けられなければならない。で、勿論目標もあそびの生活の中で、機会を捉えて指導され、

或る時は個人的に、或る時はグループで、或る時は大きいグループでと、機会ごとに指導した。

十五人の幼児数だったが、あることにおいては十五へん同じことをくりかえし指導した。またある時は十五人十五色の指導をした。

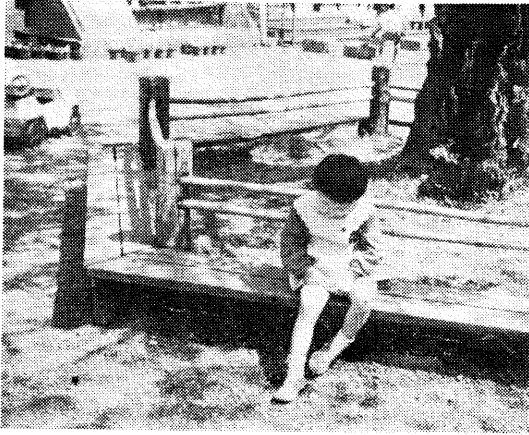
幼児のあそびの生活に常流れているその流れは、時により、日により、月により、穏であり、激であるから、何月何日にはこの指導という予測もうらぎられ、幼児の毎日の生活状態の観察により、目標は実施された。

実態

入園当初は、幼児数十五名の中男子(八名)の中に附添

とはなれにくいものがあったが、女子（七名）は活発なものが殆んどで、父兄の協力を得たせいか、比較的「あそび」にスムーズに入れ、二、三の幼児が仲間に入りによく、教師が油断すると泣顔になってしまう程度で、比較的積極的な組であった。

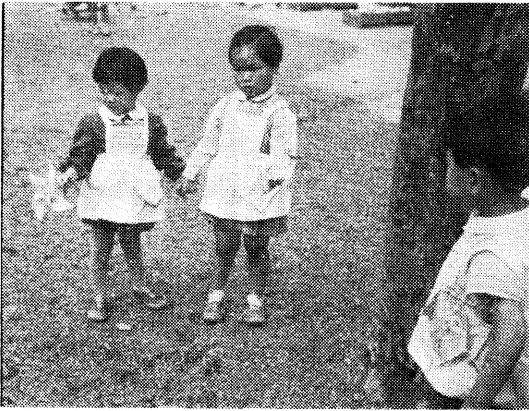
入園二日目、女子は「ままごと」を場にして、激しい口げんかが起ったのは、これが



あそべない子

三歳児かとまで私の頭を、私の計画をまどわした。

習慣においては、例年のおり、あるものはできるし、あるものではない時とできない時がある程度で、また幼稚園生活での習慣も順当な経過を示した。一学期の間は手洗所とお部屋の間を往復、手洗とかたづけ、下ばきの洗たくに目をくらしたことも、三歳児の思い出



そろそろお友だちができる

であり、教師のちょっとした不注意、きのくばりが原因となることも痛い反省であった。

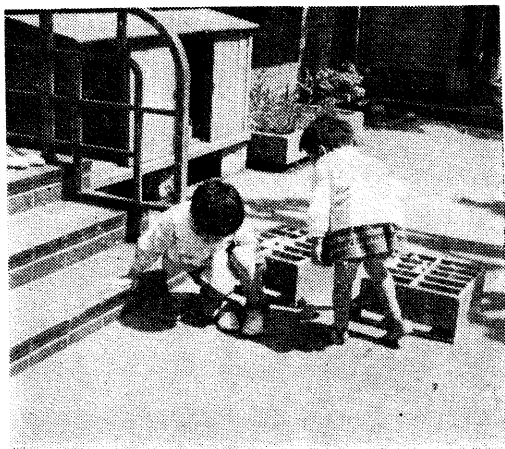
一年後の今日

身心共に成長した十五人を眺め、明るく笑顔で幼稚園生活を我もの顔に生活している人たちを見る時、私のお腹の底ではうれしく満足で親馬鹿に似た気持ちさえ沸く。



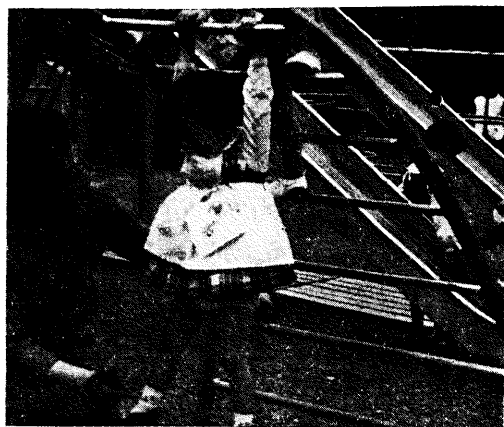
みんなあそんでいる

くつのはきかえ



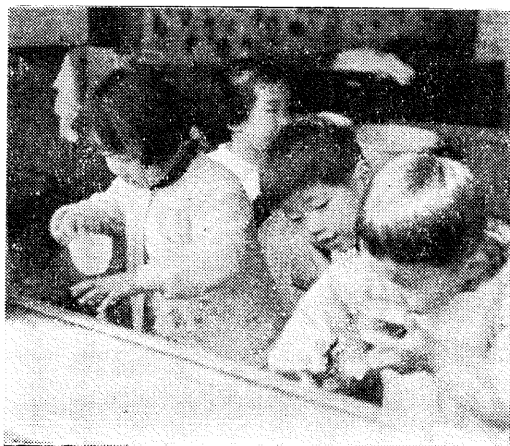
- 私が先だたなくとも自分たちでするところが見えてきた。
- 一応、ボツンとあそべないで立っている人はいなくなつた。
- 生活の習慣も決つてゐることはスムーズに生活の流れに入つてきた。
- 三歳児としての基本的なことは大体可能とされたが、次第に次の年齢への移行として

先生も一しょ



- 内容的な深さ、よしにつけあしきにつけ違つた面での成長がみられてきて、深く、こまかい面での指導も当然要求されてきた。これも一つの成長だろう。
- 自分というものを赤裸裸に出してきて、個性がはっきりとつかめるようになってきた。このこともこれから活動する幼児の内容や能力に対して芽を出したと言えよう。

うがい 手洗



- 留意したことは
- 家庭の環境なるべく近い環境にするように留意した。
- 朝のむかえ方ということに特別留意。朝登園してきた時の教師のむかえ方で幼児の一日が支配されるといって過言でない。特に三歳児や入園当初の幼児には大切なことで、これがすべて一日の、またこれからの

幼稚園生活への基になると思うので特別に留意した

○私の態度に特別気をつけた。笑顔で明るくやさしくと、自分の年令に対して、幼児が親しみ、安定感を持つよう、年令の暗さ、威圧を与えないよう、若い教師のあの親しみを幼児に与えるように自分の行動やことばづかいに注意した。教師が若く美しく行動的なことは、とくに三歳児に対しては大切なことだと思つた

○これは改めて取り上げることもないが、幼児とよくあそぶ、体を動かし労力を惜まず教師が率先して行動した

例えば始めは手洗所へゆくのも自分から幼児になつてゆく、片づけなども命令ではなく自分がやる。とくにはじめの中は何でも教師がやってあげる。母親が手をかけすぎると非難される場合があるが、そのようにかげすぎる位世話をよくするようにした。このことは一年間に次第に、或いは、或る時にはその指導は変化するが、手をかけすぎると位世話をよくしてあげることが、精神方面にもまたかえつて幼児の生活指導の指導方法としてよき効果をあげることが

私は自分なりの信念として持っていた

○これは自分自身の気持のことだが、指導においてあせることをとくに自重した

三歳児でもある程度、やることを表現することはやればできるが、それこそ毎日毎日自由のびのびとあそはせた。何かやらせなければと思つておきてきた。この年令ですべきこと、この年令相応の完全なる発達するにはこの生活が大切なのだと常に考へてきた

○健康につながるいろいろのことは特に配慮し、おかあさま方との話し合いで協力してもらつた

○幼児の日々の成長変化に気をつけ新しい指導のハロメーターにした

生活状態の変化成長によって指導の指針にし、机上の計画を行なうのでなく状態を観察しながら計画をすすめていくようにした

反省

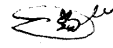
入園児を迎えた時はあれもこれもと理想像をえがいていたが、毎日毎日過すうちに、今考えると果されていけないことが大きな反省

だ。三歳児の指導はいかようにもなる。教師が楽に過せば楽に過せる。しかし一番大事であり、むずかしい。自分の頭には何かあつた三歳児の顔と、三歳児の理想の世界とが浮かぶが、その世界へいれるのはむずかしい

一年後、成長したみんなの顔を見る時、将来への基礎が止まってきたか、一人ひとりの将来の力が芽を出したかしらと不安になる

幼児教育は何も表に現れる教育の結果はない。それだけにこの三歳児の時の生活が大切であり、むずかしいことは何度くりかえしてもきえない。幼児だけでも年令がすすめる成長は、する。しかしそれでは教育の必要が無かつた。現代の社会状態で、幼児も昔よりりうになつたと思われるか、それはある面だけであることと、三歳児は三歳児としての完全な成長をしていなければならなく、三歳児でも三歳児のことができなくとびこした成長をすすめるような指導をしないようもう一度ここで反省したい。今後、基礎となる三歳児の指導は特に研究したいものだ

* * *



関 治 子

昨年度、受け持った三才児の生活を「社会」の観点から、実際に即して記してみることにする。

幼児の生活は、年令が低いほど、未分化な状態にあるので、とくに三才児においては、領域別に考えるのは困難に思われる。しかし幼児の生活と指導法を、複雑ながらも美しい織物にでも例えるならば、その横糸・縦糸を分析して考えてみることはできる。

「社会」の場合は、とくに幼児の生活の中に占める割合が多い。三才児のこの組の指導目標を当初、次のように考えた。

1. ひとりひとりが十分にあそび、生活習慣の基本を体得できる。
2. 友だちともあそび、集団生活の基礎を養う。

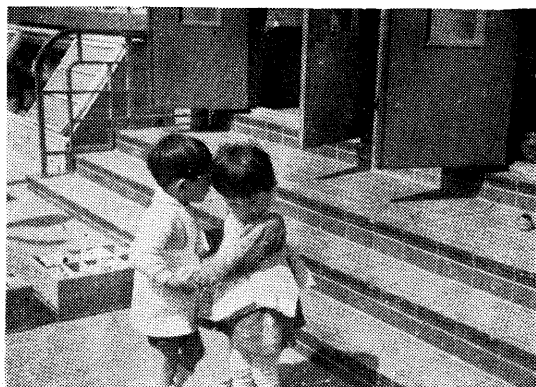
実際の指導も、この点に力を入れてきたの

である。

「社会」の中でも、その内容はいろいろで、書物にも書かれたりしているが、私は、あそびの発展——ひとりあそびからグループあそびへの移行の状態——の一年間の記録を中心に筆を進めていきたいと思う。

四 月
幼児にとって始めての集団生活を楽しく出発させ、安定感を持たせたいと、一番苦労をし、また張り合いもある時期である。それぞれが、個性をもっている。皆、うれ

	A 夫	B 子
一日目	祖母から離れない	家人から離れない
二日目	母と一日一しょ	年長組女児と登園、時折大泣き
三日目	母と一日一しょ母から少し離れ笑顔がでる	母と来て一泣き、母を離れて先生に一日中ついていく
四日目	母と一日一しょ母と一しょならあそぶ、泣かない、皆の所はいかない	朝一泣き、離れる、帰り一泣き
五日目	母と一しょだと遊具でもあそぶ、次週は離すよう母と約束する	朝、一泣き、元気にあそぶ、帰り、皆と一しょにはならない
二週目	祖母ときて大泣き、しかし離れさせる、先生にくつつく	朝ちよつと不機嫌だが泣かない
三週目	父とくる一泣き	泣かないでくる、先生のまわりであそぶ、皆とは殆ど交渉なし
	父とくる一泣き、先生のまわりであそぶ	何の抵抗もなく入ってくる、皆と一しょに並んでかえらない
	元氣一ばいあそび、ややもするとかきまわす型	朝は調子よい、生活の区切りがつかない



しように幼稚園生活が始った。A夫とB子が家の人から離れない。その個々の性格に適した方法をとりたいたいと考える。

前頁の表は家庭の側と、教師とよく話し合つて実行してみた例である。

さて、他の幼児のあそびはどうであろうか。大体において、女児の方が、まごことを媒介として、すつとあそびに入つていく。幼稚園のままごと道具に魅力があるのか、かな

り興味深そうに、時間も長くあそぶ。五人六人と

人数もふえて一時間位つづくこ

ともある。相互に会話をしつて関

連をもつてとい

うところまでい

つてはいないが、

積極性の強い幼

児の発言が自己

中心的で、しつ

こいので、時折、ごたつく。

積木・組木など教師の方から積極的に出してみる。男児の方が主に寄ってくる。ただ、

つみ上げたり、ひっくり返るのがおもしろか

つたりでやや衝動的、目的意識はみられない。

天気の良い日は、庭で砂場やブランコなどであそぶ。まだ遊具を使うものには手を出さない幼児もいるが、気分は明るくなる。こうした折に、靴のはきかえや、並んで歩くことなどを実際の折にふれて指導する。



おもしろいおすべり

三週目になると、朝、家の人から離れない

幼児がいなくなつたので、何となく安定感が

出てきた。自分が集団生活になじんできたの

で、はみ出してしまう人を気にして掴まえて、何とかしようとする可愛い正義漢もあらわ

れる。自発的に遊具をひろげ出したり、砂場・すべり台など、全身を十分に動かすものは、ひとりひとりが精一ばいあそんでいる。

五月



並んでいきましょう

列になって歩く、お手洗いにいくことなどの生活習慣がだんだんに身についてくる。

「かごめ」に十四人も、次々に加わってきて、多ぜいであそぶ。もちろん、教師も入っている。しかし、持続時間は短い。

ままごと道具をもって電車ごっこに入ったり、行動範囲が広がってくる。電話を使い始めたので、私も積極的に話す。すぐ応酬する幼児もいる。この辺は、教師対幼児の活動が随分多い。

五月になって、ふとしたことから、泣くこ

とを覚えたC子が、時々、大泣きをする。

自動車の玩具が魅力的で仕方がない。ほしくて仕方がないようすの五人、そしてまた一人、皆我慢している表情。やはり数も余り豊かなのがよいとはいえない。この機会に、代るがわる使うことを指導する。しかし、この頃から、自己主張も始まり、けんかがみられるようになってきた。ピクニックごっこという目的のあるあそびが二、三人のグループではじまった。いつの間にか、男児が、かたま

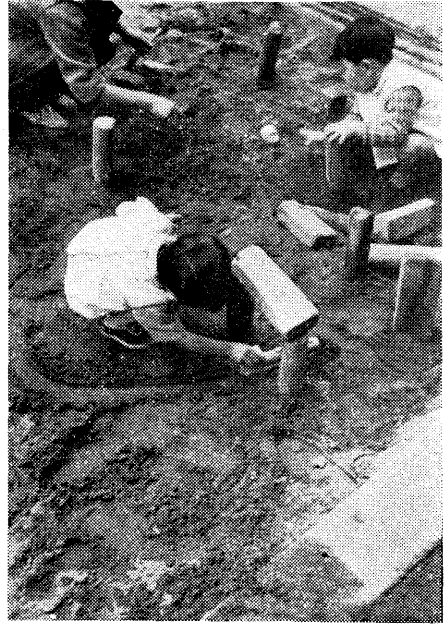
ってあそぶ傾向がでてきて、その行動半径が

広がってきた。

学内の広いグラウンドまで散歩にいく。斜面を、フルスピードでかけおりたり、本当に楽しそう。解放された満足な表情を見逃せない。こうした時、友だちと手をつないで、歩くことも指導し易い。

砂場でも、互いに反対を向いてあそんでいた場合でも、教師のちょっとした話しかけで、幼児同志を結びつけることができる。今度は友だち同志であそびつづけることができる。

これでつきょうにしようか



あら早くつくりましょうよ

六 月

ひとりひとりが十分にあそべるようになってきて、だんだんに、友だちという意識をもつてほしいところである。

友だち関係ができたためか、けんかがふえている。その解決に、三、四人で口を揃えて「どうしたの?」と、何とかしようという相互関係と協力がみられてきた。また、男児の方に、三人位のグループ意識がみられはじめた。そして、このグループが、組木の

ヒストルをもって、女児のままごとグループと話をしは、交流してあそぶことが始まりめた。

七 月

目的をもってあそび出すことがふえてきた。積木でも、いかだづくり、お城づくりなどと考えてつくる。しかし、同一目的で何人かが協力するという事は殆どない。積木あそびは共通で同時にやっているが、ばらばらに目的を達しているところ、それでも友

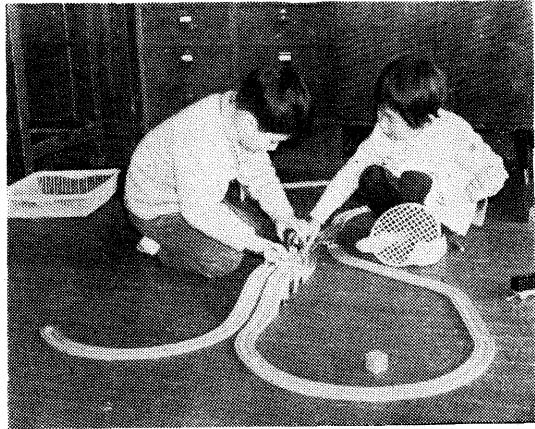
だちと一しょにやっているという意識を持っている。

九 月

夏休みのあと、玩具のとり合い、すぐに手が出る。女児の間にも、けんか、そして手が出る。口でも自我をおし通す。

砂場・ままごと・ブランコ・ジャングル・汽車ごっこなどに三、四人ずつグループとなつて、じっくりとよくあそぶようになった。「月ロケットごっこ」は、八人も一しょ

これつなげたら？



で、単純だが、ストーリーのあるあそび。長くつづくのは二、三人であとは入れかわる。「花一もんめ」も八人位、多ぜいであそぶ。年長組も入ってきて一しよにあそぶ。

十月

玩具を二種類併用したり、使い方を变化させたりして工夫がみられ、あそびが進歩す

る。

そして、友だち間で、会話を交しながら、グループであそぶことが多くなる。十分、子どもたちだけで、食堂ごっこなど規模を大きくしてあそび、後片づけも、それほどたいへんでなく、自分たちでやる。

男六人のグループは「動物のお家ごっこ」。指人形で、同一テーマで、かなり長時間までまってあそび、グループ意識が大分出てきた。

こうなると、グループに入れないB子は、しきりと、友だちをひっかきに行く。恐らくいじわるというよりも、関心を示すようにこういう行動に出るのであろう。教師と一しよに、B子もあそびに入れてもらおうよう、やってみる。D夫も、他の友だちにおかまいなく一人で、思いのままあそんでいることがある。E夫は教師の傍にばかりいて、友だちの中には長時間いられない。こういう二、三人がいるのだが、運動会で、多ぜいの幼稚園の友だちと一しよに行動することを体得する。

十一月

あそびの種類がぐんとふえてきた。

自動車ごっこ 五人、戦争ごっこ 三人

(バトミントン)

学校ごっこ かくれんぼ

病院ごっこ 縄電車ごっこ 三人

犬ごっこ 十人

およめさんごっこ 三人(長時間)

マイクごっこ

グループの人数がふえたこと、時間が長くつづくようになったことを感じる。あそびが發展してちがうあそびに入っていることがよくある。

十二月

おすもうごっこ 余り長つづきせず

マイクごっこ うたをうたう、組木のマイク

注射ごっこ 組木の注射で人形に

車庫づくり 協力して積木で

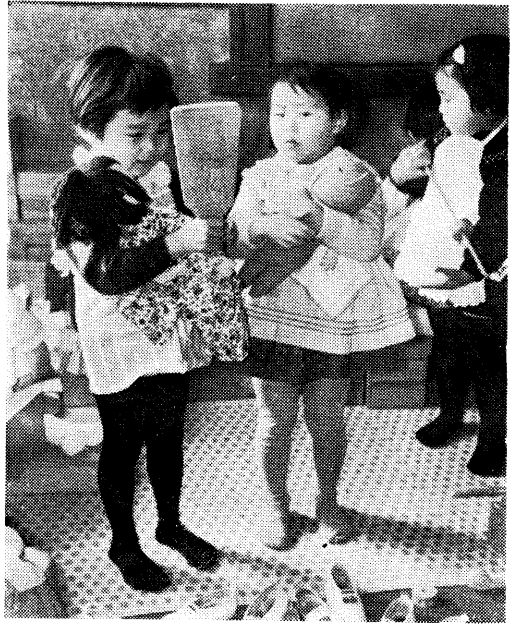
食堂ごっこ ままごと道具で

舟ごっこ 積木の舟、くじらとり

警察ごっこ

お家ごっこ

引越して二階をつくる
女兒全員、時々言い争い



二 月

のりものごっこ、心配性のE夫も、現実と夢の世界旅行で、イギリスだスイスだといながら、森におさんほにいきましようなどと相当長時間あそぶ私も、この頃は、子どもの方に入れて貰ってあそんでいる。

動物ごっこも、火事、消防、などとストリーがあって、これを凝人化して、よいあそびでもしろい。時には、男女がばつとわかれて二グループ位で、じっくりあそぶこともある。連続して筋を追ってあそび出す。「また明日、このつづきしましょうね。」そしてちゃんと覚えていてやっている。

三 月

一人だけ、グループごこのあそびに入れな

こうして、一年間のあそびの足跡を顧みたら、友だちの中に入っていくに良かった四人のタイプを考えてみよう。

1. E夫 心配性で理論派(批判的になる)
2. F夫 いばり屋 (知ってるものとすぐに口出す)
3. B子 反抗期的 (反対ばかりいう)
4. D子 納得型 (納得しなければ何もしない)

その他、十人十色であるが、以上書きつづってきたことは、集団生活の場で発達し、育成された記録である。この中には、幼児自らが、自然になるべくしてなった姿もあろうが、ある時は意識して、ある時は無意識のうち、幼児の生活のあり方を考えての言行があったことも否めないつもりである。

羅列しただけのような味気なきも感じられるが「社会」の指導は、とりわけ、実際を通してなされねばならない。しかし、現場にいる者として、この実際の上に、理論づけを吸収していききたいものだと考えている。

一 月

羽根つき、ピアノ弾きが加わる。並んで順番をまわすことが入ってくる。B子少しづつ仲間入り、E夫は、友だちの中に入りきれず、心配性。

本屋さんごっこ、犬ごっこが大流行。小さい本をつくって絵をかくと、組木を鉛筆にして学校ごっこにもなる。男女混合でかなりの人数であそぶ。